

## 朝倉義景とその山城 一事績と防御一

福井市歴史ボランティア「語り部」 齊川博之

### 1. はじめに

歴史には必ず大きな転換期が存在します。朝倉氏が越前国に入ってきたこともその一つです。朝倉氏は北ノ庄を中心に活動した6代134年と、一乗谷に拠点を移してから越前を支配した5代103年の計11代237年の長きに亘り、越前国の歴史に大きな影響をもたらします。しかしながら、乱世の波に飲み込まれた朝倉氏は11代当主義景を最後にその歴史に幕を閉じることになります。

近年、一乗谷朝倉氏遺跡の発掘や発見文書などから調査研究が進み、朝倉氏をより正しく知る機会が増えています。朝倉氏の歴史が、その後の北ノ庄、福井の城下造りに大きな影響を与えたことは言うまでもありませんが、その一端をご紹介しますとします。

### 2. 越前国での朝倉氏の歴史（237年）

- ・建武4年(1337年) 朝倉広景の越前入国
- ・貞治5年(1366年) 朝倉高景、越前7カ所の地頭職（宇坂庄・東郷庄・坂南地区など）
- ・文明7年(1475年) 朝倉孝景 越前国守護の任命(文明3年)を受け、越前国を平定
- ・天正元年(1573年) 朝倉義景 織田信長との戦いに敗れ義景自刃。朝倉氏滅亡。

### 3. 朝倉孝景(宗淳)と朝倉義景

#### ■朝倉孝景(宗淳)時代⇒家格の上昇と内政の安定

- ・長享元年(1487年) 「公方奉公分」 將軍陪臣から直臣(將軍直属の家臣)へ
  - ・永正13年(1516年) 「白傘袋・毛氈鞍覆」の使用許可 守護・国主待遇を意味する。
  - ・天文7年(1538年) 將軍義晴の「御相伴衆」 管領に次ぐ高い身分
- ⇒戦国初代孝景から始まる幕府への忠誠(軍事支援・経済支援)が四代孝景の時代に認められる。

#### ■朝倉義景時代⇒朝倉文化の集大成と新たな取り組み

- ・永禄4年(1561)4月 棗庄大窪浜にて「犬追物」の挙行
  - ・永禄5年(1562)8月 安波賀河原脇坂尾にて「曲水の宴」を開催
  - ・元亀元年(1570)4月～天正元年(1573)8月 元亀争乱(信長との戦い)
- \*外交:越前国外及び海外製品の出土 \*物造り:生産工房の発見 \*城造り:畝状堅堀の発見  
⇒内外への国力の誇示と新たな朝倉文化(外交・物造り・城造り)への取り組み

### 4. 朝倉氏(義景)の文芸と武芸（事績その①）

- \*朝倉氏は、戦国初代朝倉孝景に倣い、主体性・自主性のある文化を追求している。

## ■文芸(歌道・連歌・絵画・芸能)

- ・歌道と連歌の集大成(「曲水の宴」の催し)
  - ・大規模な詩筵(「永禄五年一乗谷曲水宴詩歌」によれば和歌 23 首と漢詩 7 首計 30 首の作品)
  - ・義景はむかしを想う人物であり、儒学を治政に活かしていた。
- ・お抱え絵師「曾我派」の活躍
  - ・蛇足 4 代宗誉は曲水の宴に列席。6 代直庵・7 代二直菴は日本美術史における鷹図の権威。
- ・芸能(越前猿楽)
  - ・越前猿楽は朝倉氏の保護の下で盛んになり、義昭饗宴の時には 30 名に及ぶ舞が披露される。

## ■武芸(小笠原流・中条流)

- ・小笠原流の集大成「犬追物」の举行
  - ・義景は小笠原流「弓馬の法」を学び一流を極めたことが伝わっている。
  - ・「犬追物」3 日間に及ぶ総勢一万人の軍事演習 越前国内外への軍事力の誇示
- ・中条流の相伝
  - ・「柔よく剛を制す」を基本とし、「平法」と呼ぶ武の威徳によって災いを未然に防ぐことを本意とした流派。中条流「平法」は中条長秀を祖として、一乗谷に伝わり、重政のより加賀前田家へ伝わる。
  - ・中条長秀～甲斐常治～大橋高能～山崎昌巖～富田長家～景家～富田勢源・景政～重政
  - ・富田勢源(富田流)から、鐘捲自斎の『鐘捲流』、伊藤一刀斎の『一刀流』、佐々木小次郎の『巖流』などの諸派が生まれる。

## 5. 朝倉氏(義景)の外交と物造り (事績その②)

### ■出土品から見える外交、発給文書から見える外交

- ・義景の外交への想い(渡海交易を求める)
  - ・海外品の出土⇒ガラス皿、コブレット、指輪、黒褐釉四耳壺などが遠く海外から越前国に入る。
- ・出土品から見える外交
  - ・日常雑器としての中国製品(碗・皿)が、国内品の瀬戸・美濃焼に迫る量が出土している。
  - ・北国船の模型が出土。多くの中国銭が出土。
- ・発給文書から見える外交
  - ・越後、出羽との交易があった。琉球(島津家)とは交易合意が確認されている。

### ■発掘調査から見える物造り

- \*一乗谷朝倉氏遺跡からは、生活用品や戦のための用品などが数多く出土している。また、それらを造っていたと思われる場所が確認されている。その内、金属・ガラスの物造りについて取り上げる。
- ・金属工房、ガラス工房の発見(10ヶ所以上の工房跡が確認されている)
  - ・金、銅、鋼、鉄、ガラスなどの職人の存在があり、物造りがあった。
  - ・金、ガラス工房跡は、上級武家屋敷と思われる敷地内にあった。一般的に流通しない刀装具やガラス製品の工房の発見は、最先端の技術を有する職人集団の存在を窺わせる。

## 6. 朝倉義景の戦いと城造り（事績その③）

### ■朝倉義景の戦い(大将義景)

- ・永禄7年(1564年)加賀へ出陣 朝倉当主70年ぶりの国外出陣
- ・元亀元年(1570年)近江へ出陣(志賀の陣) 信長『天下は朝倉殿へ、我二度と天下を望まず』
- ・元亀3年(1572年)近江へ出陣 浅井氏救援 小谷城<sup>おおづ</sup>大嶽に陣
- ・天正元年(1573年)近江へ出陣 浅井氏救援 刀禰坂<sup>とねきか</sup>で大敗(唯一の負け戦)  
かねて身の かかるべしとも思はずば 今の命の惜しくもあるらむ 義景

### ■朝倉義景の城造り

- ・越前国の城造りの特徴(畝状<sup>うねじょう</sup>堅堀<sup>たてほり</sup>)
  - ・『築城記』「山城には堅堀<sup>たつほり</sup>を造るものだ」 義景へ伝わり、義景から家臣へ、武田若狭へ相伝。
  - ・越前国では、多くの山城で畝状堅堀が確認される。一乗谷城<sup>いぬやま</sup>・茶臼山城・波多野城・西光寺城からは数十本の畝状堅堀が現存している。何れも、天文・永禄年間で軍事的緊張が高まった場所であり、元亀・天正年間に整備されたと考えられている。

### ■一乗谷城(朝倉氏の本城・連郭式山城)

- ・東西約440m、南北約620mの範囲で遺構が確認されている越前国最大の山城です。防御施設として、曲輪104(土塁付8)、堀切11、堅堀11、畝状堅堀約140が確認されている。
- ・山上御殿と呼ばれる標高約420mの曲輪群には、千畳敷・観音屋敷・赤湊神社・宿直・櫓跡などが確認され、約800坪以上の広大な敷地となっている。
- ・一の丸、二の丸、三の丸と連続する曲輪は、長さが数百mに及び、曲輪の間には大きな堀切と周りには数多くの畝状堅堀が現存している。三の丸の標高は約470m、南北に約110mの長さで周りには多くの畝状堅堀が守る曲輪(防御施設)となっている。
- ・一乗谷城には、名城と言われるもう一つの顔があります。千畳敷は450mからの眺望を楽しむおもてなしの空間でもありました。城が高い山に造られ優れた眺望を持つことは、軍事拠点としては重要ですが、景勝地であることも大きな意味がありました。

## 7. おわりに

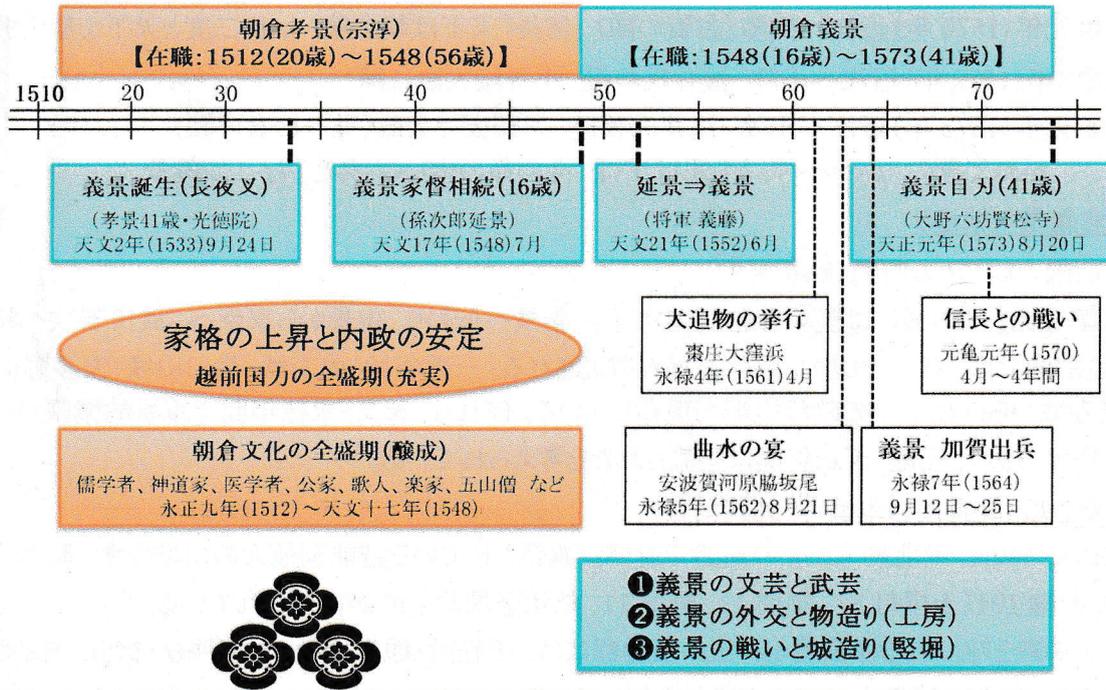
義景の代で越前朝倉氏の歴史は終焉を迎えたわけですが、義景は幕府関係・財力・軍事力・生活文化などあらゆる点で、非常に恵まれた環境で生まれ育ったことがわかります。今回、義景の文芸や工芸、城造りなどを見てきましたが、一つの共通点があります。それは主体性・自主性をもって、行動をしているという点です。このことは、『朝倉孝景条々』や『築城記』から伝えられていることをその時代にあった形で実践している所から確認が出来ます。文武両道への取り組み、新しい技術の取り組み、交易の重要性を形にするなど義景の一面が分かってくるような気がします。

そして、朝倉氏が築いた一乗谷を中心とする歴史は柴田勝家によって北ノ庄に持ち込まれ、北ノ庄の街づくりに生かされています。義景たち、朝倉氏が培った歴史は現在においても、生き続けていることでしょう。

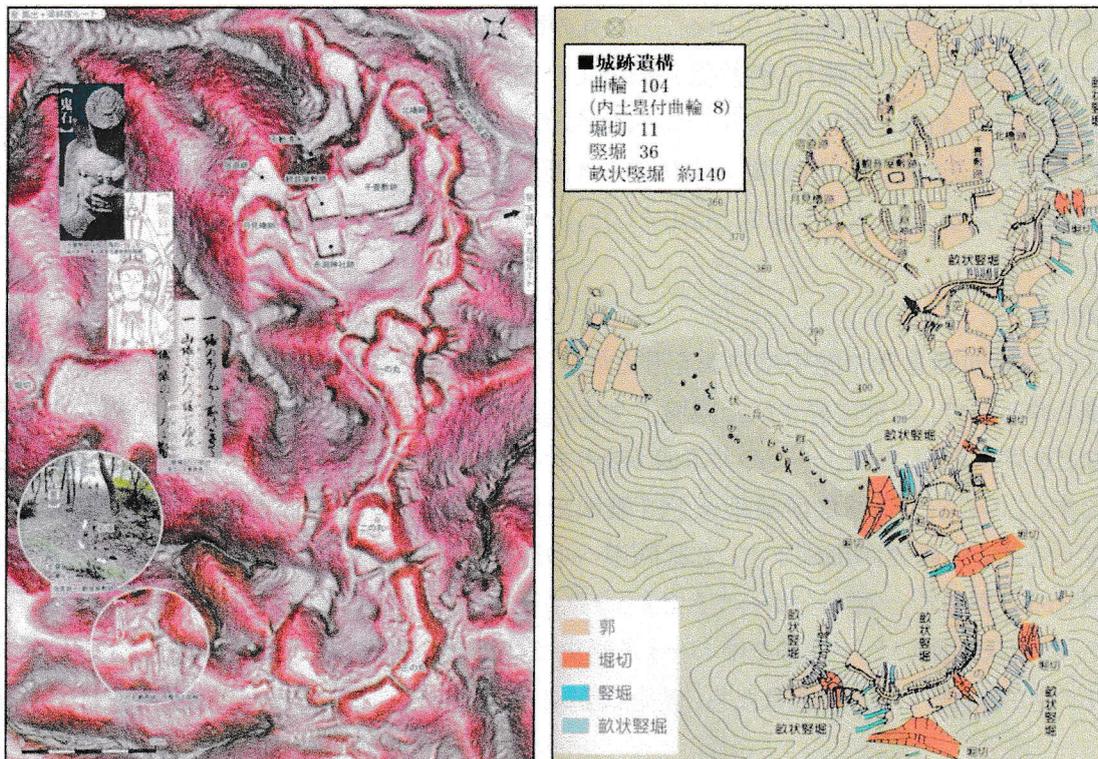
以上

## 朝倉義景とその山城（一事績と防御）

### \*朝倉義景の生涯\*



■一乗谷城(朝倉氏の本城) 標高約450m・東西約440m・南北約620mに亘り遺構 ～一乗谷朝倉氏遺跡博物館資料～



赤色立体地図